

シンポジウム『第17回世界湖沼会議を終えて』

これからの環境活動はどうあるべきか ～世代をつなぐ環境活動の問題点』

開催日時：2019年2月23日（土曜日） 13時30分から15時30分まで

開催場所：茨城県霞ヶ浦環境科学センター 多目的ホール

参加人数：52名

シンポジウム要旨

第一部 報告「ハイスクール会議の成果と課題について」

（一社）霞ヶ浦市民協会 理事長 市村 和男 氏

ハイスクール会議の経過について、2017年7月17日のハイスクールプレ会議から始まり、その後3回の勉強会（①キックオフ集会、②シンポジウム「里山・里川・里浜がつなぐ湖」への参加、③上高津貝塚・宍塚大池の見学と湖上体験スクール参加）を経て、2018年7月16日に「サテライトつちうら第1弾 ハイスクール会議～高校生が考える将来の湖沼と流域～」を開催したことについて報告がありました。

ハイスクール会議は、「第17回世界湖沼会議に向けて、将来を担う高校生に湖沼と流域の関わり合い、霞ヶ浦の汚濁原因を正しく理解してもらい、持続可能な生態系サービスの実現に向けて、設定したテーマの将来像とその実現に向けた方策について高校生ならではの視点で提案をいただくこと」、「他校の生徒とディスカッションを通して理解を深めると共に将来の湖沼と流域についての将来像を提言してもらうこと」、「茨城県の湖沼環境を世界に発信できる人材の育成を目指すこと」を目的として開催し、その成果は、「湖沼と流域の将来像について、高校生がそれぞれの研究・議論を通じて霞ヶ浦の水質について考える機会になったこと」、「連携する重要性に気付いていただけたこと」、「行動することが環境問題解決の根幹であること」であり、課題は「一度壊してしまった自然を再生するには時間が掛かること」、「市民・地域・世代間の連携をどう構築していくかということ」、「私たち（大人）の責任として高校生の発表の場を継続して開催させることが必要であること」であるとまとめました。

第二部 講演「世代をつなぐ環境活動はどうあるべきか」

茨城大学農学部 教授 黒田 久雄 氏

「世代をつなぐ環境活動はどうあるべきか」というテーマで御講演をいただきました。講演の中では、2018年10月14日に開催された第17回世界湖沼会議の学生会議について、一過性のもので終わらせず霞ヶ浦流域の中で継続していくことが重要であること、ハイスクール会議について、高校生を中心とした生涯学習の一環として考えるべきであるとの話がありました。

その後、若い世代に対する大人の関わり方として、昔の話をする際にそれが事実に基づいているもので客観性を持った話ができるものかどうかを一度考えるべきであることや、日本土壤肥料学会等の複数の国内学会による若い世代の研究成果等の発表の場を提供している事例とともに、若い世代が発表する場を創出することの重要性について説明をいただきました。

また、環境教育について、文部科学省の「環境教育 総則」に「環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養う」とあり、道徳性とはやって良いことと悪いことを判断できることで、環境教育が道徳性を学ばせる役割を持っていることや、環境教育と環境学習の違いについて、環境教育は学校や指導者などにおける意図的・計画的な環境に関する指導であり、環境学習は学習者の主体的な学びを意識した環境に関する学習であるという和歌山県の「わかやま環境プログラム」の定義を紹介されました。

さらに、世代をつなぐことについて、第17回世界湖沼会議の「いばらき霞ヶ浦宣言2018」の柱の1つである「生態系サービスを次世代に引き継ぐこと」を解釈し、環境問題や環境対策につなげていく必要があり、問題解決の能力を養うために子どもから大人まで世代を問わず、教育機関のみならず、流域市民、農林漁業者、事業者、行政等の連携、協働が必要であることが説明されました。

最後に、世代とは人生のライフサイクルの中の一部を指していて、中学生は高校生になり、高校生は大学生に、社会人になるということを認識することが必要で、世代をつなぐ環境活動とは生涯学習であることを結論としました。

第三部 意見交換会

[講師] 茨城大学農学部 教授 黒田 久雄 氏, (一社) 霞ヶ浦市民協会 理事長 市村 和男 氏

[コーディネーター] (一社) 霞ヶ浦市民協会 理事 眞山 淑枝 氏

「人を環境教育・環境学習・環境活動に促すものは何か」をテーマに、両講師から意見をいただきました。

黒田氏は、霞ヶ浦ではアオコの大量発生がモチベーションとなり、多くの人がアオコを何とかしたいという気持ちから活動を起こしたが、昔のようなアオコの発生が少なくなったことから、アオコや富栄養化という切り口では人が集まらないため、活動を促すためには、外来種、生態系、SDG s等、多様な切り口で考える必要があると意見しました。

市村氏は、いばらき霞ヶ浦宣言 2018 に記載された、流域住民、農林漁業者、事業者、行政、市民団体、研究者等のパートナーシップが重要であり、連携を取りながら次世代に霞ヶ浦を引き継いでいくための環境活動を実施すること、環境学習で教えられた人が教える側になるサイクルがあること、環境活動を通して霞ヶ浦の印象を良くして街を元気にすることが大切であると意見しました。

その後、会場の参加者を交えた意見交換会を行い、以下のような意見がでました。

- ・ 環境学習には多くの体験が必要。体験活動を充実して欲しい。
- ・ 湖岸清掃等、各自治体が別々に行うのではなく、皆がまとまって一斉に行うべき。
- ・ 湖岸への不法投棄改善には、大人の道徳性が必要。
- ・ 湖岸のゴミがとても多い。ゴミがモチベーションになると思う。
- ・ 湖沼会議での発表内容に文化的サービス（芸術等）の分野が少なかったことが残念。
- ・ 湖沼に関する文化的活動を望む。
- ・ 土浦市主催の子ども郷土研究と連携してみてもどうか。
- ・ ゴミは自然には無くならないことを学んでほしい。
- ・ 環境活動は楽しく連携しながら積極的に実施することが大事。

最後に、コーディネーターの眞山氏が、「これからの環境活動には世代、地域、立場を超えた多くの人に参加することが必要であり、世代をつなぐ環境活動は生涯学習であることを肝に銘じなければならない」とまとめました。



シンポジウムの様子



(一社) 霞ヶ浦市民協会 市村理事長



茨城大学農学部 黒田教授



意見交換会の様子